

カシオペアを利用して5年

A・H (17歳青年保護者。2025年12月記)

カシオペアでお世話になるようになってから5年近くが経とうとしています。利用を始めたきっかけは、当時中2だったASDの息子に、マンツーマン対応が可能な居場所が必要になったからでした。

息子は好きなことには集中できる反面、興味がないものに抵抗感があり、集団行動や対人関係が苦手でした。幼稚園時代からずっと登校渋りが続き、中学では完全に不登校になっていました。他人に対する拒否感が強まっていたことに加え、遊びや学習も受け入れにくくなっていたので、利用していた放課後デイサービスも難しくなりました。個別対応が可能な場所はとても少なかったです。

そんな時に出会ったのがフリースクールのカシオペアでした。カシオペアでは中久木先生が各々の子どもに合わせて対応してくれますが、息子の場合は当初から母親も交え、とことん雑談をしています。息子は好きな野球の話ならいくらでもできました。中久木先生はそれに対して感心したり、質問したり、共感しながら根気よく話を聞いてくれました。

私は息子がカシオペアで中久木先生と楽しそうに話す姿を嬉しく思いながらも、中学卒業が迫り、進路について悩んでいました。恐る恐る息子と今後について尋ねると「高校なんて無理」の一言。予想通りでした。いつもなら息子を説得し、無理にでも進学先に連れて行くお決まりのパターンを始めるところです。しかし正直なところ私は「その通りだ」と感じていました。息子は元々できないことは拒否するけれども、できることはやる子でした。それが拒否ばかりになってしまった今、進学は現実的ではありませんでした。しかし私の頭には「そんなのありえない」という考えもはびこっていました。相反する思いを抱えながら、切羽詰まった時期にようやく私は「いつものパターンをやめる」と決意しました。中学卒業後は進学しなくていいと息子に伝え、関係各所にそう表明しました。

私は心のどこかで「いつかきっと息子は我慢して（親の思う）現実に合わせてようになる」と考えていました。私は決断に迷うといつも、社会で用意された正しいと思われる道をむやみに選ぶ癖がありました。たぶん私自身の生き方の癖なのでしょう。しかし、それを別人格である息子に無理強いするのは間違いでした。やっとその呪縛から逃れるスタートを切れたように思います。

息子はもうすぐ18歳になります。相変わらずカシオペアで野球談議に熱心です。自宅ではネットやゲームの時間が多いですが、少しずつ良い変化が見られるようになりました。何よりも変わったのは、母親の私の心境でしょうか。世間から勝手にプレッシャーを受けなくなり、息子を見る目に余裕が出てきました。以前はカシオペアの教室に入るなり寝転ぶ息子を見ると不安がよぎりましたが、今では何も思わなくなりました。慣れてしまった面もありますが、「この子は気持ちが体に顕著にあらわれる。今はリラックスしているのだから問題ない。この子自身が必要だと感じれば寝転ぶことはない」と自分の言葉ではっきりと言語化することができるようになりました。これはカシオペアだけでなく、「一步の会」という保護者の気づきと学びの場の賜物だと思います。

「一步の会」で私は、久しぶりに自分の考えを言語化して他人に伝え、それについて意見をもらう貴重な場を得ました。保護者の皆さんとお話をする中で、私は長年くすぶっていたネガティブな感情が昇華されていくことに気づきました。私には親としての罪悪感や劣等感が歴然とありました。しかし皆さんは同じ悩みを持つ親として共感を示し、温かく私の話を聞いてくれました。私はいつしか否定的だった感情を「今できることを頑張りたい」といった肯定的な言葉に置き換えられるようになりました。仲間に受け入れてもらえることの有難さを痛感しています。

今となっては、私達親子には安心してひきこもることができる場所が必要だったのだとわかります。中久木先生は息子に対して折に触れ「それでいいと思うよ」「仕方ない」と言います。そして時々「こうするといいね」と指摘し、ごくまれに「それはだめだよ」と叱ってくれます。そんなシンプルな環境に身を置いたことで息子は安心して家族以外と過ごすことができるようになり、母親の私は息子と穏やかな会話ができるようになりました。やっと前に進む基礎ができたと思います。